

連載

5

在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (62歳・内科)

心の扉は開ける



ある日突然、在宅医療中に当院から電話がありました。

「先生、在宅医療依頼です。88歳の作家の方で寝たきり状態との事です。」

訪問してみると100坪くらいはある新築に近い豪邸でした。しかし、庭には雑草が茂っていて玄関までスムーズに辿り着けない、池にも水も魚もなく伸び放題の雑草…。やっとの思いで部屋に入ると、畳はほこりだらけ、布団は垢だらけ、窓は開けない…。

夫は東大卒のインテリらしいのですが、あまり詳しくは聞かない事にしました。子どもたちは一

流大学卒で、県外に務める会社員であるとの事。

入院はせず、通院もしたくなくて、ただ自宅で最期を迎えたい(看取り)というご本人の希望でした。

私たちは、まず庭の草むしりをし花を植えることにしました。そして、できるだけご本人の都合の良い日に合わせ、庭のお手入れと掃除を当院スタッフの研修としてボランティア活動させてもらうことにしたのです。

その後、家の窓を開けてもらえる日もあり、心の扉も少しずつですが開けてもらえるようになりました。総合栄養剤投与や静脈注射などの医療

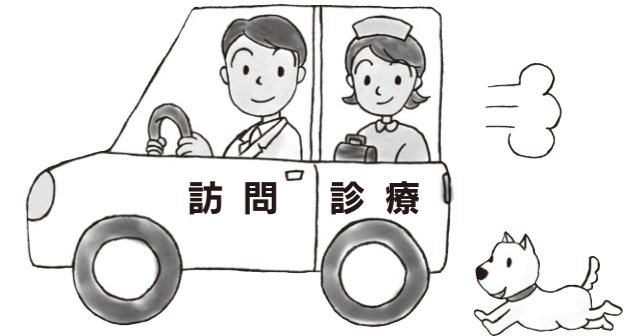
行為も出来るようになっていきました。

残念ながら急性心肺機能不全となりましたが、ご家族からは感謝していただきました。当院スタッフには研修もさせていただき、人間性を磨く事ができた貴重な経験となったのです。

『看取り』の仕方は、国策としても自宅・施設中心ではありますが、やはり生まれ育った環境で最期を迎えたいものです。しかし、やむを得ない場合は病院ではなく、施設での看取りが今後の主流となっていくでしょう。

「お医者さんが来てくれる」

質の高い在宅医療・看護・介護を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>